財団法人新住宅普及会
住宅建築研究所報1978

住居における木造架構の比較研究 ——その2——

太田邦夫
浅井賢治

§1 研究の目的

この研究は，先年度に引続いてヨーロッパ大陸，とくに東ヨーロッパからバルカン半島にかけての木造架構技術の研究である。

本研究の主題は，木造住居の屋根，壁，床などの架構方法を，過去・現在にわたり，これらの諸地域において調査研究することにあり，とくに地域の自然環境，歴史的背景の両面にわたり，構法の変化とその住居の形態に及ぼした影響を建築の実例のなかに見出だそうとする試みである。

今年度は，1974年及び1977年の二度にわたる現地調査の結果を整理するとともに，あらたにユーゴスラビア・ルーマニアを中心に第三次の調査旅行を行い，従来の資料に追加補足しながら，現時点におけるバルカン半島全域の建築的特性を考察する段階を目標に研究を進めた。

§2 研究の方法

§2－1 研究の対象

使用材料別による分類，地域別による分類，建物別による分類等は先年度の例にならい，主として19世紀末から20世紀の前半に至る間の住宅の伝統的構法と，現在進行中の住宅生産の手法との比較が調査の主題となった。研究の順序は，現地での調査と資料の蒐集のあとに文献研究と他の地域との比較照合作業をおこなった。

§2－2 現地調査の範囲

イ. カルパチア山系

チェコスロバキア（ボヘミア北部丘陵地）
ルーマニア　　（オルテニア）

ロ. バルカン半島西部（ユーゴースラビア）

クロアチア　　（ザグレブ周辺）
ボスニア　　（サライエボ，ヤイツェ周辺）
マケドニア　　（スコピエ，オホリッド周辺）

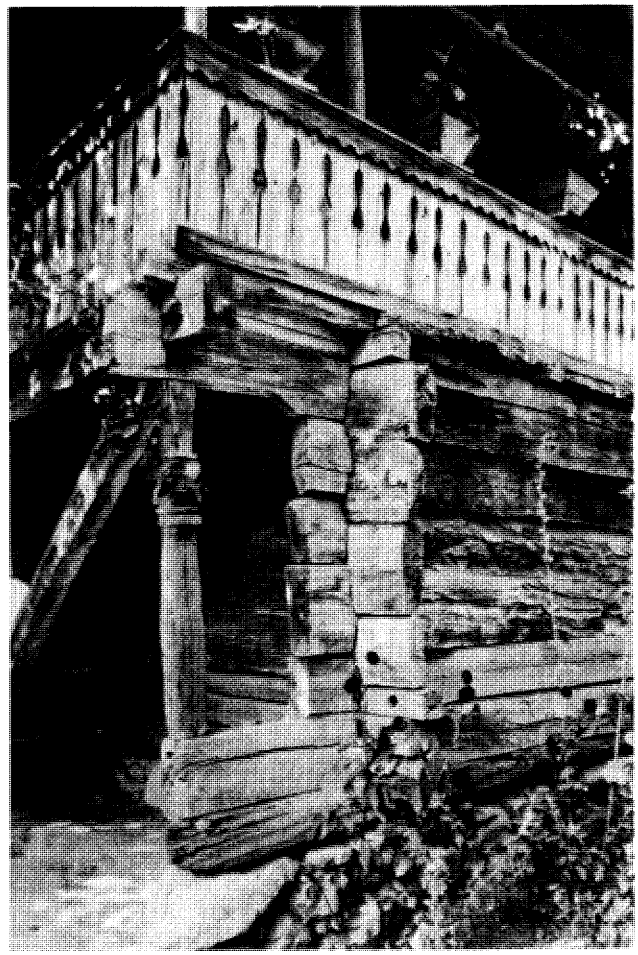
ハ. バルカン半島南部

バルカン山脈　（トルノボ，ガブロボ周辺）
ブルガリア南部（ソフィア・プロブデフ）

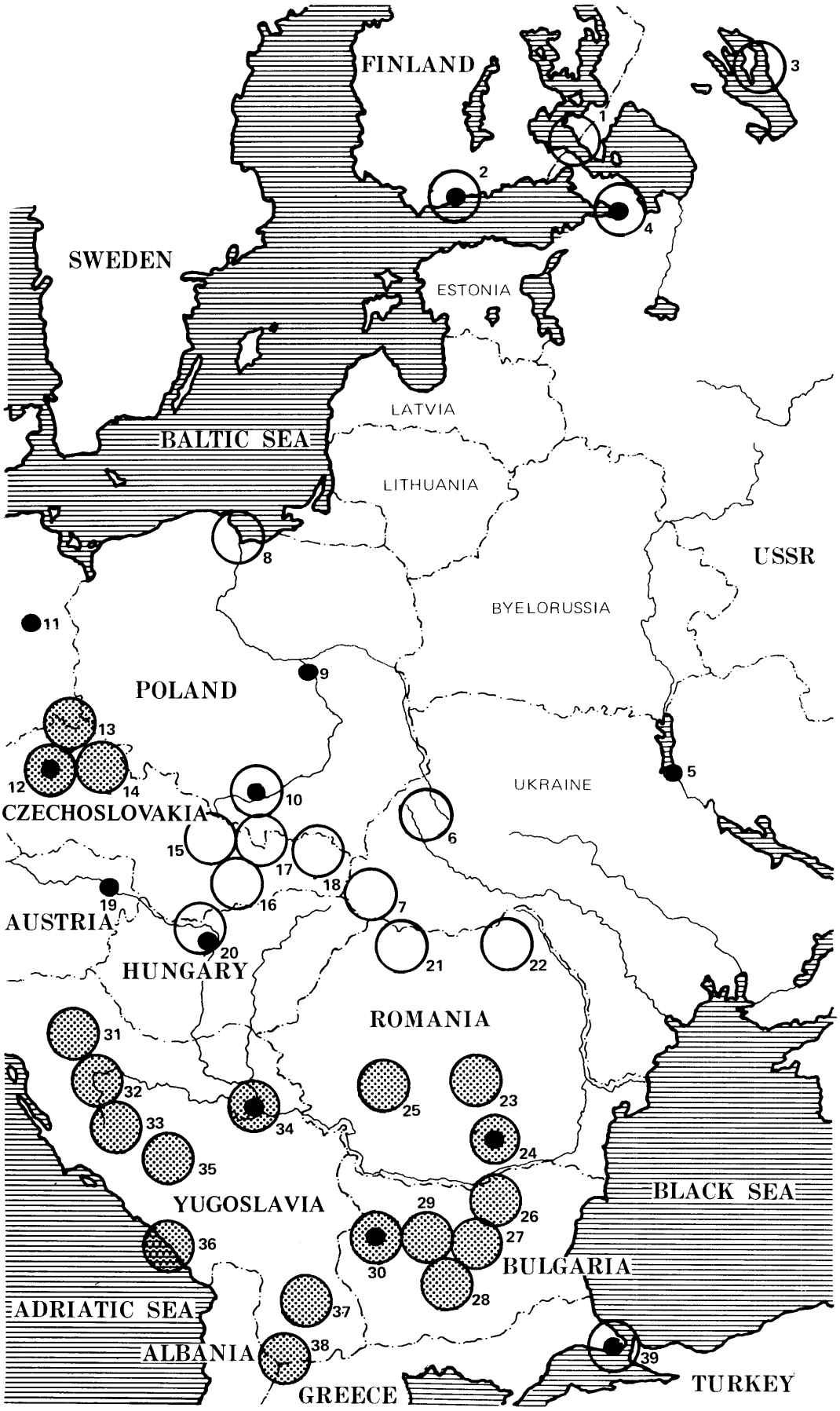
ニ. 調査時期　　1978年8月～9月

ホ. 調査方法

- 家屋及び集落実地調査
- 野外博物館（ブカレスト，クルテシュアラ等）その他保存施設にて取材
- 研究機関での文献調査と資料交換
- 文献蒐集



写真－1　Gorj 地方　Romania の民家



Finland
1. Lappeenranta & Imatra
2. Helsinki

USSR
3. Kizhi
4. Leningrad
5. Kiev
6. L'vov
7. Trans Carpat

Poland
8. Gdańsk
9. Warsaw
10. Krakow & Zakopane

Germany
11. Berlin

Czechoslovakia
12. Prague
13. Liberec
14. Hradec Králové
15. Orava
16. Hel'pa
17. Poprad
18. Bardejov

Austria
19. Wien

Hungary
20. Budapest & Szentendre

Romania
21. Baiamare
22. Suceava
23. Brasov
24. Bucharest
25. Tirgu-Jiu

Bulgaria
26. V. Turnovo
27. Garnovo
28. Plovdiv
29. Koprivštica
30. Sofia

Yugoslavia
31. Zagreb
32. Jajce
33. Travnik
34. Belgrad
35. Sarajevo
36. Dubrovnik
37. Skopje
38. Ohrid

Turkey
39. Istanbul

東ヨーロッパの調査地域

§3－1　カルパチア東南部の木造住宅

§3－1－イ　地域の特性

カルパチア山脈がルーマニア中央部で西にのびてトランシルバニア山脈に連らなる地域は，北側にチェコ・ハンガリーの文化の流れをくむトランシルバニア高原，南側に南バルカンや地中海・黒海の文化の北限となるドナウ低地をひかえるため，両地域の対照的な建築手法がこの山脈をはさんだ丘陵地や谷あいの建築に混在している。気候条件はカルパチア山脈と酷似しているが，冬季の降雪量はすくない。林相は標高2,000～2,500 mの高地では常緑針葉樹林が続き，その山麓には落葉広葉樹林が広がる。建築用材としては，山地ではモミ，丘陵地ではブナが主材であるが，この地方ではやはりカシが建物の構造材として尊重され，効果的な使用法が考えられている。

伝統的な木造住宅は，木壁組積造が古く，紀元前2世紀頃からその存在が認められている。しかし，地中海沿岸などの文化の影響で，石造の壁体も併用され，一階石造，二階木壁造という構成も南西部にすくなくない。一方，黒海沿岸からドナウ流域には，ふるくから木の枝やつたを編んで芯材とし，粘土で壁をつくる手法が伝えられており，ルーマニア南部の住宅の構法の主流となっていた。山間部の木壁組積造の外壁も，粘土や漆食で保護されることがおゝく，内部の表面仕上，とくに炉や竈の造形には塗壁のすぐれた技術が保存されている。最近の住居は，農山村ではレンガの壁構造の上に，木造母屋組をのせる形態がおゝいが，ブルガリヤやユーゴスラビア南部にくらべると，まだ屋根の勾配は強く伝統的な形への愛着が強い。

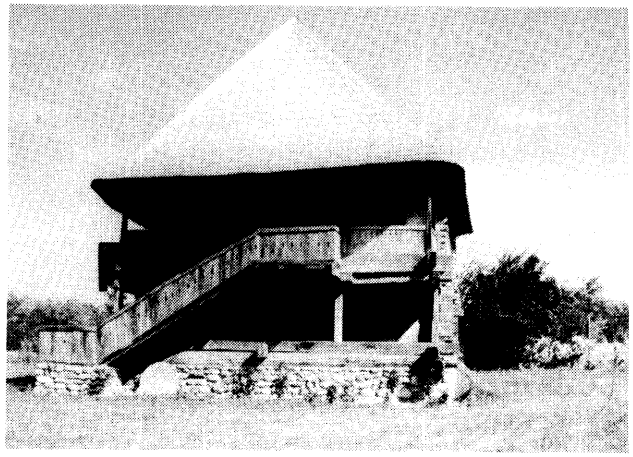
平面の形態は，居室部分はカルパチア山脈のものと同様にその面積はすくなく単純な長方形であるが，建物の前面に吹放ちの柱廊を持つ住居形式が南下するにつれおおくなり，その伝統は二階建になっても，深い庇のついた二階バルコニーとして愛好されている。これらの柱廊に露出する柱や桁は，主屋部分とは異なり，構造的な負担がすくなくないので，おそらくは地中海や東方文化の影響をうけてか各部材には装飾的な彫刻が施され，柱頭や柱脚を組合せた石造柱のような繊細な切込をもつ支柱の造形が各地方で伝承されている。大規模な住宅になると，ここ数世紀前までがトルコの圧政下にあったために，一階部分を敵の略奪にそなえて堅牢な組積造にし，最上階を解放的な木造にする構造がおゝく残っている。その場合でもローマ風のアーチの繰返しが下層部分の外周部分に依然残されていることは，ブルガリヤなどの閉鎖的な大邸宅と相違する点で，ルーマニア人のラテン文化への傾斜がうかがえる。

村落の形態は，山間部は牧畜，林業を主体とした散村であり，丘陵地や平野部では本道に添わない集落としての塊村（Haufendorf）が数多く，谷間にはその中間型の線状の散村がみられる。トランシルバニア山脈の北側には，12世紀以降ゲルマン系の民族の流入がみられ，ドイツ人が優越する地方では幾何学的な道路を持つ村落や，道路の両側に建物を直角に配置する街村がおおく，建物の平面に北方系の強い影響を与えている。ドイツ人の4倍に及ぶトランシルバニア地方のハンガリー人の存在は，文化的にはルーマニアのラテン的伝統のなかでは全く異質であるが，建築的にはドナウ流域の組積造又は粘土塗壁造の手法をそのまゝ導入しただけで，木造架構としてはルーマニア在来の手法がはるかに進んでいたため，彼等の住宅は形態的には全くルーマニア東北部又は南西部の伝統的な建築の系列のなかに含まれてしまっている。

§3－1－ロ　オルテニア（ゴルシュ地方）

ルーマニアの首都ブカレストの西方200 km の地方都市ティルグ・ジウ（Tirgu Jiu）を中心とする地方はゴルシュ（Gorj）と呼ばれ，南西ルーマニアの伝統的な木造住宅の代表例が豊富な地域として重要である。トランシルバニア特有の形態としては，ここオルテニア（Oltenia）の他に山脈北側のシビュウ（Sibiu）又はブラショフ（Brasov）周辺の地域の実例も欠かすことができないが，ゴルシュ地方の構法は，木壁組積造の二室住居から二階建の大規模な架構までの発展段階に対応した解決をそれぞれ示しており，とくに二階の床組と吹放ちの廊下の構法は独特で，ブルガリヤ・トルコなどの二階建の住居の手法と共通ながらも，よりその原形にちかい伝統的ディテールが見出だせる。（写真－2）

二室住居の一隅を入口のポーチ（Prispă）とした小住宅の原形（図-1，2）は，間口がひろがっても土台を長方形の外縁にまわし，その隅に独立柱を建てる原則を変えていない。建物の外周に屋根荷重が集中するためで，又独立柱の足固めに他の適当な方法がないままに，土台をまたいでPrispă に入らねばならなかった。図－3はこれを板張りした例。図－4のような土台のない例はトランシルバニアにはすくなく，東ルーマニアの軸組塗壁

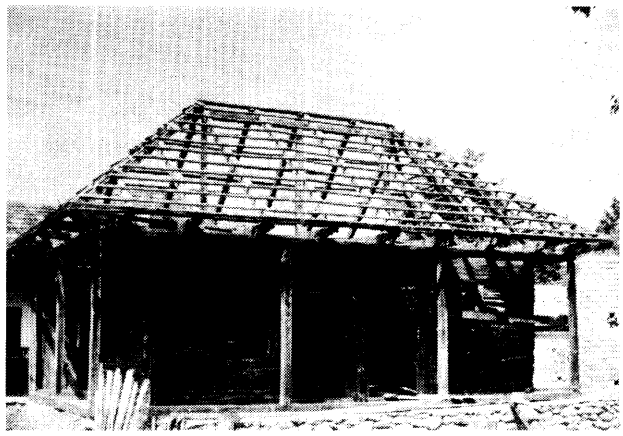


写真－2　Curtişoara，Gorj地方の民家　外観

の構法の地域におゝくなる平面である。建物の前面乃至四周にひろがったPrispă は開放されたテラスの性格を帯び（図－５），そのまま二階建ての平面に発展し，階段を二階バルコニイの内側に取付ける手法に発展する方向（写真－１）と，平屋のままテラスを前方（左右どちらかの端，又は正面のみ）に突出させ，母屋の寄棟とは違う突出し屋根（ turret)に発展する方向（図－６）との二派にわかれる。前者の場合は二階の屋根は単純な寄棟で，一階も横架材による単純な長方形の平面でよいが，後者の例が二階になる場合は，一階は上階の不整形の平面に対応しやすい組積造の構法をとることが多い（写真－３）。二階のテラスの面積を減らさないように階段はテラスの外側につけられるようになり，その踊り場だけは床梁の張り出しか，細い柱で先端を支持することで，ゴルシュ独特の木造住宅の基本が出来上った（写真－１）これらのポーチは，平屋の場合，柱と土台だけのものが最も古く，その次には地上60*cm*位の位置に横木をつけるか，土台と足固めをかさねる形態が生れ，完全に手摺やパラペットをまわすのは最終段階で，装飾が豊かになったのは第二次世界大戦直前であった（写真－４）。

大戦後はこの地方ではレンガ壁，タイル瓦が増加し，旧来の木壁組積造，板葺は姿を消しつつある。現存の小屋組は旧来の手法（写真－５）のような（真束＋棟木＋登梁＋母屋）の組合せを軒桁から突出した水平つなぎ梁の先端までのばす方式でなく，軒桁で直接登梁（12*cm*角程度）を受け，中間の束立てを増す構法に変っている。ただしレンガ壁の上の敷桁に直接屋根を架けず，さらに40～50*cm*上方迄木造壁を追加して軒桁を置く手法も流行していることは興味深い。開口の内法高だけレンガを積んで，それからはより安価な小壁で軒高を高く立派に見せたいという住民の趣好からであるという。

写真－４　Gorj 地方の民家（Tirgu Jiu 近郊）

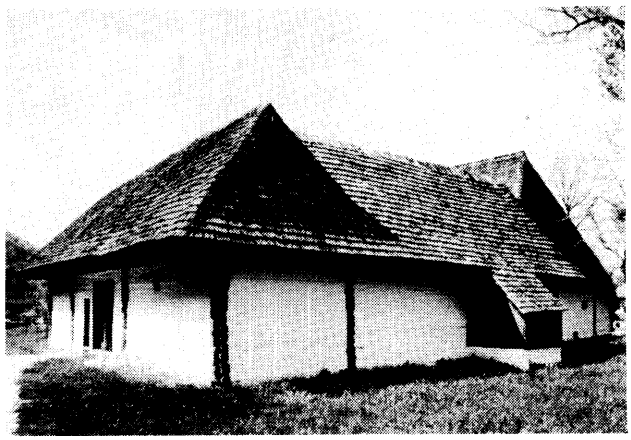


写真－５　Gorj 地方の伝統的な小屋組

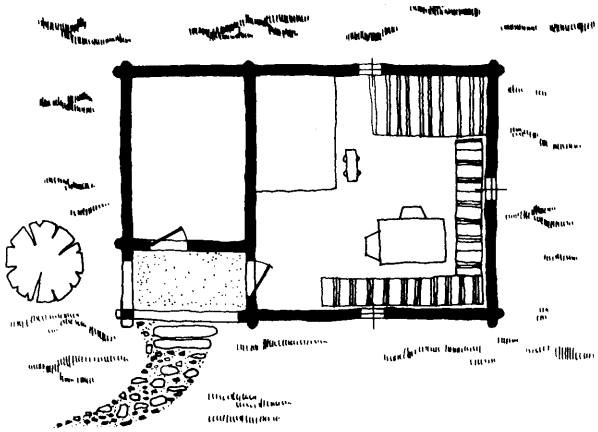
§３－１－ハ　ルーマニア東部

ゴルシュ地方から東の地域では，ブラショフからブザウ（ Buzău ）にかけての山地にも前項とおなじような平屋及び二階の木造住居の構法がみられる。横架材で出来た木壁を厚く漆食で塗る手法は，この地方から多くなりはじめる（写真－６）。現在では完全に消滅したが，住居の床を半地下とし，木壁の外側を土や草で覆った住居がふるくからルーマニア南部の低地に存在した（写真－７，図－７）。19世紀初頭でも，ハンガリー東部，ユーゴスラビア北部から，ブルガリア，ルーマニアに至る

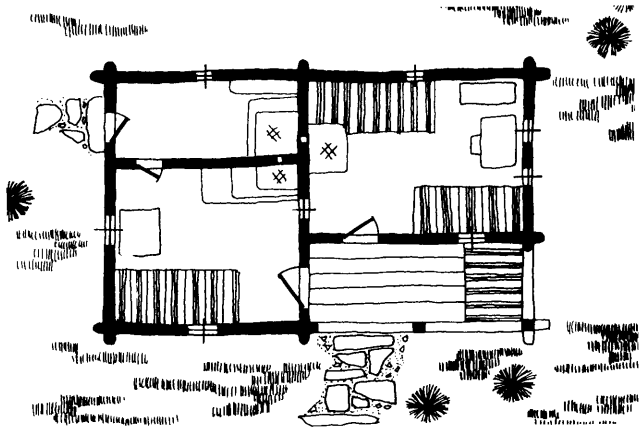
写真－３　Curtişoara，Gorj 地方の民家



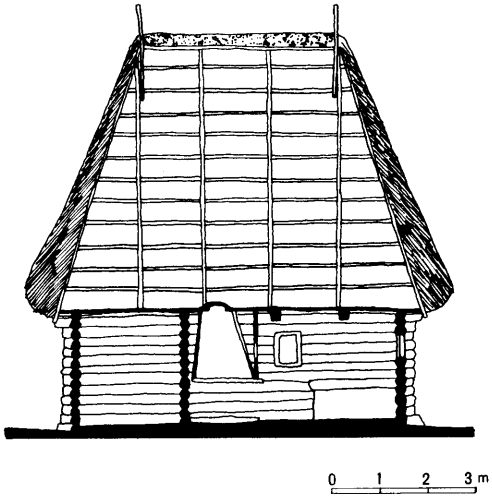
写真－６　Bran(Braşov 地方）の民家



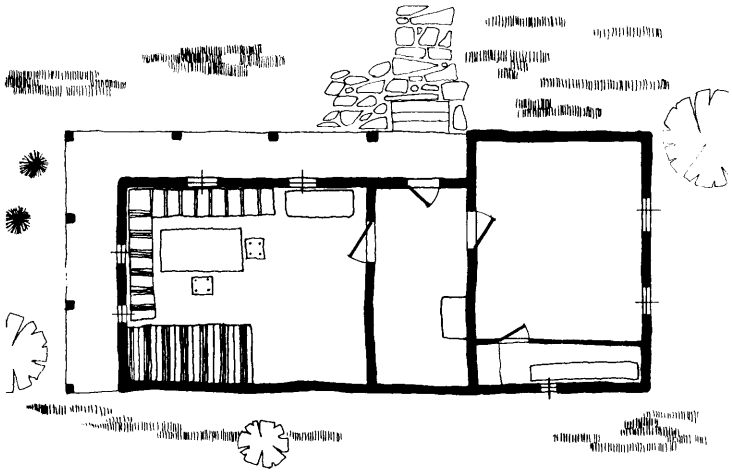
図－1　Hunedoara 地方の民家　平面図



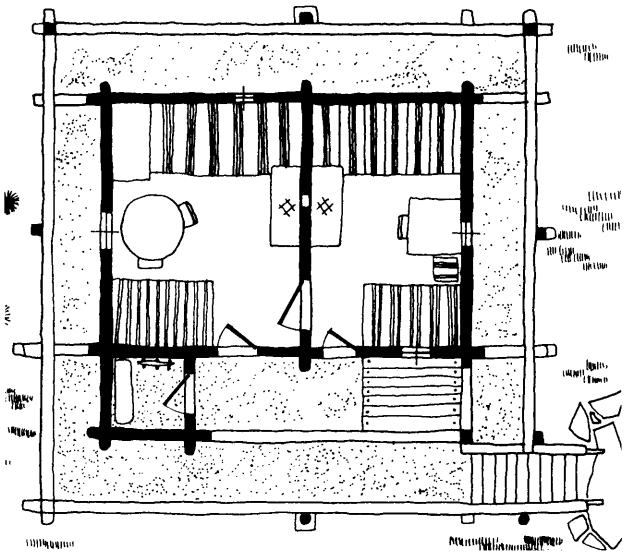
図－3　Prporu，Vîlcea 地方の民家



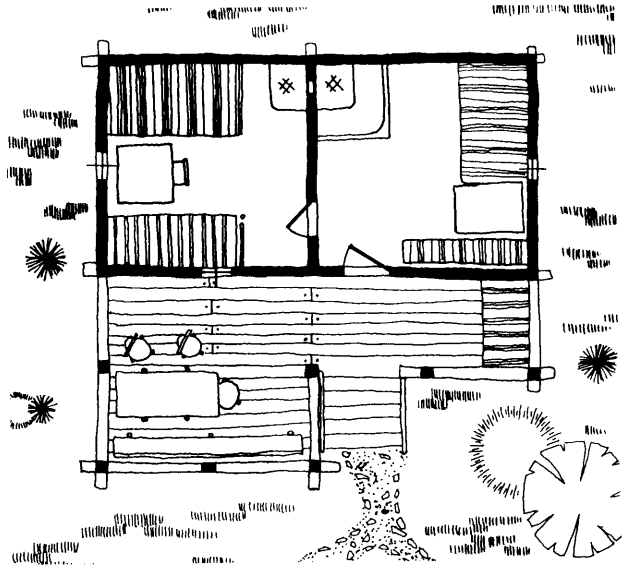
図－2　Hunedoara 地方の民家
断面図



図－4　Hunedoara，（Transilvania）の民家



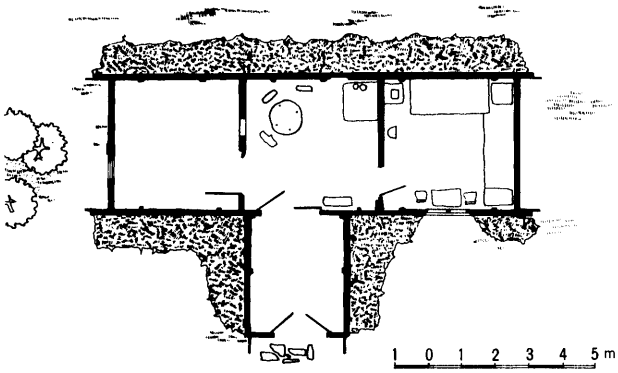
図－5　Glodeni（Gorj 地方）の民家



図－6　Ţicleni（南Gorj地方）の民家

ドナウ川流域及びプルト・シレット川の流域にその分布は及んでおり，農村だけでなく都市部でもみられたという。ルーマニアの半地下住居に特徴的なことは，T字型，十字型の平面の如何にかぎらず，入口正面の中央の区画に炉を置くのが通例であり，先史時代から長方形の半地下の住居の片隅に石や粘土の竈をきずいてきたスラブ系の伝統とは異なるゲルマン系の手法を残しているのは興味深い。

東部のプルト川流域から黒海沿岸にかけての伝統的住居の構法のなかで，ブルガリヤ東部と共通している点にポーチの木柱柱頭の舟肘木の使用がある。その形態は彫刻もなく単純である。桁と柱の仕口は，使用木材の強度に左右され，この手法は弱小材の利用を可能にする解決である。より装飾的で，石造柱頭的な彫刻をもつ木造例がコーカサスや黒海沿岸に残っており，このような肘木の使用がバルカン以東に個有なものかは興味あるところである。この地方での桁組は赤色塗料で厚く塗られることが多かった。



図－7　Gastranova (Oltenia) の民家　平面図

写真－7　Romania 南部の半地下住居　19c

§3－2　ユーゴスラビアの木造住居

§3－2－イ　地域の特性

ユーゴスラビアは西北から東南にのびるジナルアルプスによって，アドリア海沿岸とドナウ流域に分断されている。最北のスロベニヤアルプスと中央のジナラ高地との間は，スロベニヤ，クロアチアと呼ばれ，現在のザグレブに見られるように，ドイツやイタリアの影響を受けやすい。中央のボスニア，モンテネグロ，更に南端のマケドニアは山地が多く，たがいに交通の便が悪いため，各地方が弧立し勝ちで，わずかに東部のセルビア（首都ベオグラード）周辺の平原を通じて他の東欧圏との活潑な接触が保たれてきた歴史がある。建築的には，アドリア海沿岸のダルマチアからアルバニアにかけての諸都市は，ギリシヤとイタリアの組積造の文化の影響下にあるといってよく，住居の形態も，アドリア海の風土に適した開口部のすくない石造壁構造の多層住居がおゝくみられる。ジナルアルプスの林相は常緑針葉樹がおゝくなく，殆んどが落葉広葉樹との混合林であるため，ポーランドやチェコ，ロシアにみられるようなスラブ的な木壁組積造は充分に発達せず，ボスニアの山中の限られた地域にその名残りを見出せるにすぎない。中央のサライエボ以南は中世以降はトルコの侵略下にあったこともあり，バルカン南部の軸組塗壁造，レンガ（日乾を含む）や石積造を主体とする建築が主流である。

6世紀から7世紀に，先住のイリリヤ人を圧迫して東北から流入したスラブ人は，南スラブ民族としてのユーゴスラビアの言語や習慣を植えつけたが，ハンガリー平原に6世紀から9世紀末に侵入したアジア系のアヴァール人，とくにマジャール人国家の出現のために，これら南スラブ人は北方の他のスラブ諸民族との交流を絶たれた。ユーゴの山間部は冬季は気温が下り，降雪もみられるが総じてスラブ人原住地よりも気候は温暖で，陽光も豊かであり，建築の物理的環境も地中海型に近くなることから，彼等の構法が中央ヨーロッパ，東ヨーロッパ，地中海沿岸及びオリエント風の混在する内容であることは止むを得ないところである。

現代のユーゴスラビア政府は，農業の振興のうえに西欧なみの近代化路線を打ち出しており，住宅政策でも，農業労働者の住宅改善が何よりも優先される。そのため，ここ数年間，在来構法による平屋の小規模木造住宅から，レンガ造又はレンガとRCの混構造での，より面積が大きい住居（その大部分は二階乃至三階建）への改築が全土にわたって促進されており，住環境ははるかに改善されたと同時に，それだけ均質化した。在来構法の保存は，他の社会主義国に比較して最低であり，野外博物館の設置及び街区の保存には殆んど無策といってよい。

§3－2－ロ　中央高地

クロアチアの首都ザグレブ（Zagreb）周辺の住宅は，前述した如きレンガ壁，木造束立ての勾配のゆるい瓦屋根の二階建の現代風住宅に変りつつある。つい最近までは写真－8のような切妻で中央に突出しポーチのある木造板壁の住居があったが，今日では農村部でも極めてまれである。新築の農家は3寝室以上で，レンガ壁の上に臥梁，床スラブをRCでわたし，屋根を切妻母屋構法で架けたものが多い。急激に居住面積を引上げたために，住居の全部を使いこなしていない傾向があり，仕上工事を中断したまま居住している例もおゝく見られる。

ボスニアの山地にはいると，山間の村落には急勾配の屋根の寄棟木造二階屋がまだ残っている。（写真－9）この形態は半世紀前までにボスニアの山間部にみられた三室住居（半分を炉を中心とした居室Kuća，残りを更に二分して寝室Soba にしたもの）における合掌組構造の名残りである。この勾配は長板葺のもので，現代では亜鉛鍍鉄板でしか覆えない。この地方の壁は木造軸組で塗壁仕上げであり，二階床の張出しもみられるが，庇の出と同様，全体のボリュームに比べその長さはみじかい。

ボスニアの首都サライエボ（Sarajevo）の住宅は，寄棟の勾配のゆるい屋根が圧倒的に多い。一般的な小屋組の構法は，壁体の上端に10～12*cm*角の水平梁を，1.2 m～1.8 mおきにわたし，それに真束を立上げ，登り梁（10×12*cm*位）をかけ，要所をタイビームか，束で補強する。この小断面の構造材で，トラスの原理を応用した小屋組は，第二次大戦前からのものであった。

写真－8　Zagreb近郊（Croatia）の民家

写真－9　Jaice(Bosnia)の民家

§3－2－ハ　マケドニア地方

ユーゴスラビアの南端マケドニア地方は，建築的にはブルガリヤ西部とギリシャ北部に類似し，とくにその南方，アルバニアに接する地域はオホリッド（Ohrid）地方と呼ばれ，ギリシャ文明がバルカンに伝播する場合の重要な中継地であった。この地方の民家は平担地よりも丘陵などの斜面に位置することが多く，一階は地勢に応じてその平面やその構造の内容がまちまちであるが，伝統的な住居の上層部分は一様に完全な木造軸組構法で，間柱の裏表に薄板を張って下地とし，中が空洞である塗壁を数世紀以前からおこなっていた。張出した床や庇のブラケットの繰型にも同じたいこ張りの手法が用いられ，軸組の構法としては現代の手法に共通するものである。又床の出隅や壁のコーナーに附け柱やボーダーを木でまわしており，これも実用をかねたデザインであった。

屋根の形態は寄棟を主流とした南バルカン独特の瓦屋根である。現在の構法のなかで，母屋の上に石綿波板スレートを張り，その上に直接瓦を葺いている簡便な例もおおくみられた。最近ではここでもレンガ塗壁造に建て替えられはじめており，独特の形をした腕木方杖が路地の上におゝいかぶさるようにつらなる光景はやがて消えさる命運にある。施工精度の低い張出し床の場合は，下方の壁を延長させて，腕木を斜めの面内に塗り込めてしまっている（写真－10）。

写真－10　Struga(Makedonia)の民家

§3－3　ブルガリアの木造住宅

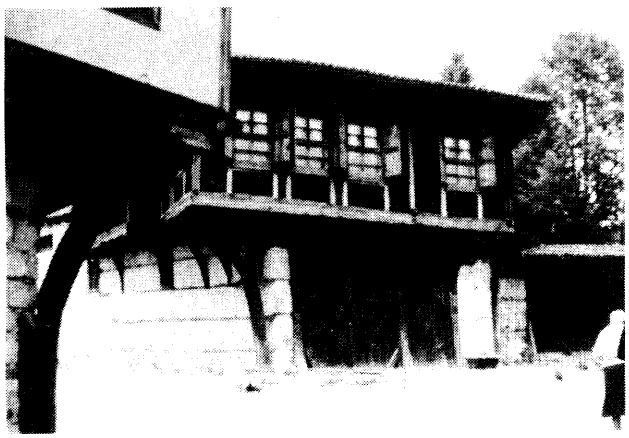
§3－3－イ　地域の特性

この地域は，東を黒海に面するのみで，国土の大部分は大陸性の気候におおわれ，中央を東西に横断するバルカン山脈と，首都ソフィアの南方のロドピ山地の存在はブルガリヤの自然条件をさらに複雑にしている。とくに後者は2,900 m級の山嶺が一団となり，降雪量もバルカン随一で，ギリシヤをはじめとする地中海世界とブルガリヤとの自然の障壁となって立ちはだかっている。ブルガリヤ人は元来フン族と同類で7世紀にヴォルガ中流からドナウ河口の北に移動し，8世紀以降バルカン山脈以南の地に定着した民族であるが，混血の結果スラブ民族としての特性が強く，先住民族であるトラキア人，ギリシャ人を抑えて，南スラブ人として最も高い水準の文化を築いた。

建築的には，ギリシャ正教圏とトルコ回教圏の両極の文化の強大な影響を受け，独自の手法を創出するに至らなかったが，近代の民族意識の発達により，山間僻地に守り続けられた民族的造形とその建築的手法の再構成が見直されつつある。文化遺産の保存はルーマニアと並び熱心で，プロブディフ（Provdiv）やタルノボ（V.Turnovo）をはじめとする遺跡や建築の保存とそれを活用した都市計画にみるべきものがある。

住宅生産では，人口の都市への集中がはげしく，RCによる床版柱で部分的に補強されたレンガ壁の都市近郊型の住宅と，在来の木造構法との隔差がはげしくなりつつある。在来構法は，木造軸組のトルコの手法にきわめて近い手法である。しかしブルガリヤ人はブルガリヤルネサンス期（19世紀末）の住宅に代表されるように，屋根や壁面に曲線を自在に用いられるレベルの優秀な建築技術を持ち，特に構造体と壁面の絵画的装飾の綜合的な処理に独特のデザインを誇っている。

ブルガリヤの林相には広葉樹系もおゝく，建築部材では，堅木が自在に加工され，又曲木も構造的に巧みに処理されて用いられている。

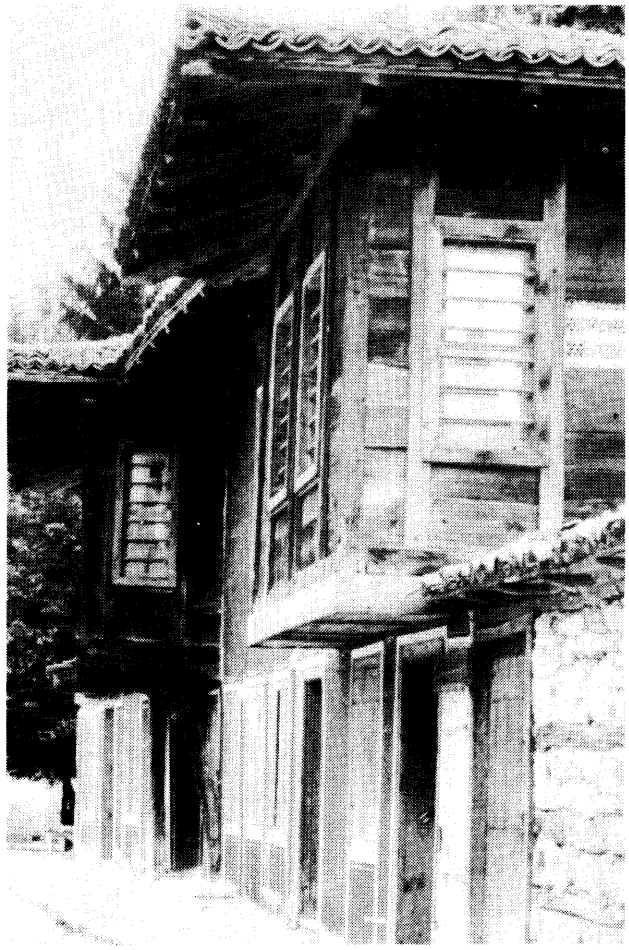


写真－11　　Koprivštica の民家

§3－3－ロ　バルカン山地

バルカン山脈は，それほど急峻でなく，多くの峠が通じ，古来からの人や物資の南北の動きは活潑であった。ソフィアの東方120km にあるコプリブスティツァ（Koprivštica）は谷間の小さな村落であるが，こゝには門構えの雄大な木造軸組の民家が街区ごと保存されている。壁はバルカンの伝統として一階は石造が多いが，特徴的なのは二階の張り出し床を支持するために，石積みのなかに木の横材を組み込み，曲材を使った腕木を要所々々に取付けていくなどの構造的配慮である。二階の管柱は間隔がせまく，しかも板張の壁を真壁にした収まりはこの地域から東へとはじまる。屋根の庇は垂だけで処理し，その出も長く大胆である（写真－11，12）。

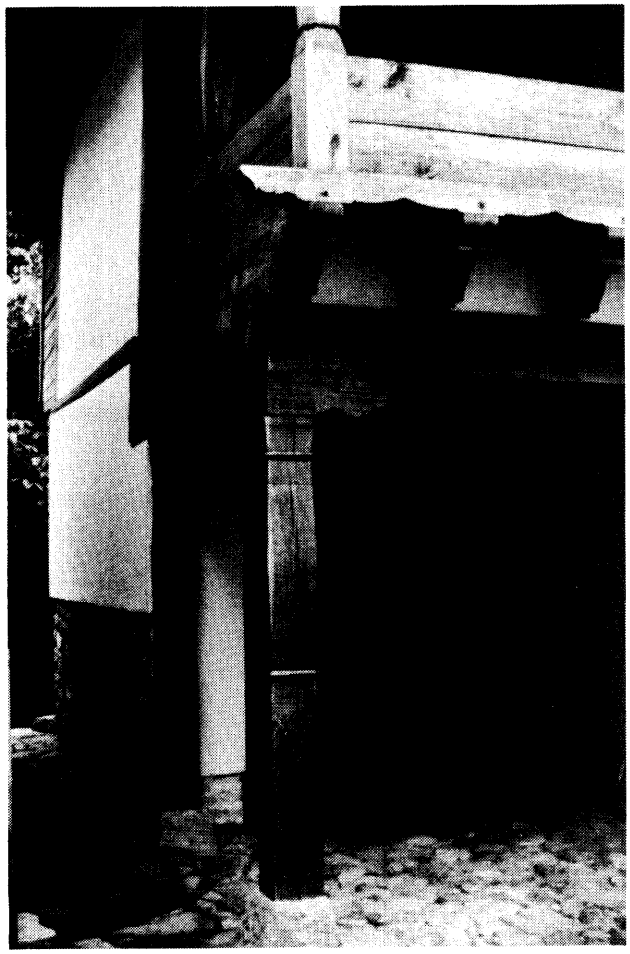
さらに東に寄ったバルカン山脈中央部には緩勾配の屋根に薄い石板を瓦としてのせた例が前世紀末までみられた（写真－13）。これらの屋根はユーゴスラビアの架構と似ているがさすがに断面は大で，一例によると小屋梁はスパン6.9 mで，16cm角が80cm間隔に入れてある。ガブロボ（Gabrovo）で保存されている木造民家の木造架構は精度が良く，他の東欧諸地域のなかでもこの周辺の地域での大工技術の水準が相当高いものであったことを証明している。たとえば，独立柱の石の土台，梁の仕



写真－12　　Koprivštica の民家

口と端部の刻み方，建具枠のディテールなど，日本の近世の民家にみられる水準での剛直，かつ細心な木造の仕口が駆使されていることに驚かされる（写真－14）。
柱頭の処理も前述したルーマニヤ東部の例と同程度のものは馬小屋などの柱列に用いられ，住居に使用する場合ははるかに装飾的な舟肘木があり，重点的な箇所に有効に用いている。このようにブルガリア中央部の一般の木造住宅の構法が他の南バルカン諸国とその架構法の原理を共通としながらも，密度の高い良質な建築を造るために必要な，かなりの構法技術の蓄積を持っていたことは検討に値する問題である。

写真－13　Gabrovo 近郊の民家　外観

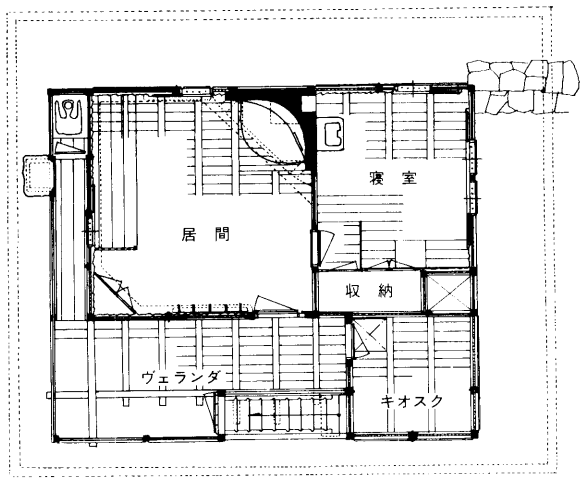


写真－14　Gabrovo 近郊の民家　柱細部

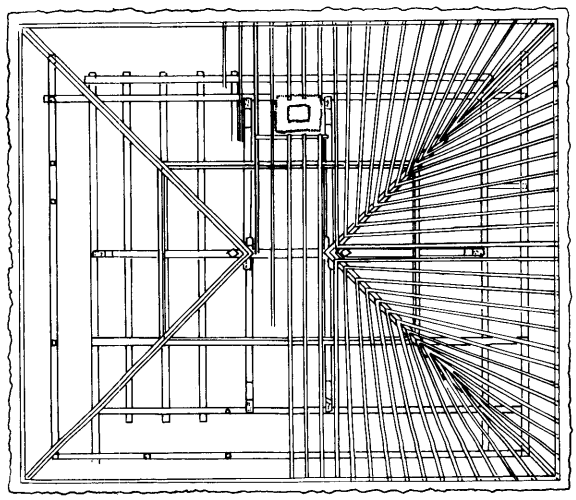
§3－3－ハ　ブルガリア南部　(略)

§3－4　ボヘミア（チエコスロバキア）北部　(略)

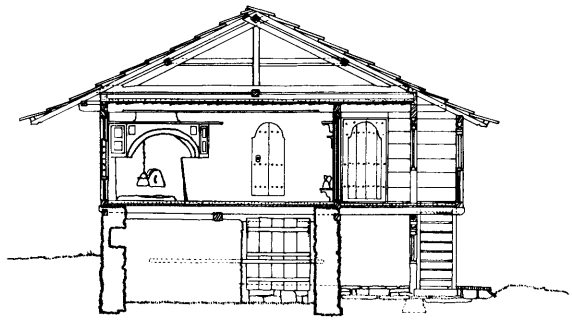
§4　木造架構の歴史・地理的背景
（文献調査）　(略)



図－8　Tryavna（Bulgaria）の住宅（18c）
平面図



図－9　Tryavna の住宅（18c）　小屋伏図



図－10　Tryavna の住宅（18c）　断面図

§5　現地調査と文献調査のまとめ

§5－1　構法の盛衰

昭和52年から53年の現地調査は，まずバルカン半島全域での在来構法の残存する度合と，一般住宅での現在の構法の傾向を概観することであった。

全体としては，壁体，屋根架構ともに純木造の伝統的構法は衰退の一途をたどり，かわって焼成レンガの壁体と木造屋根の組合せの住宅建設が圧倒的多数を占めている。バルカン南部では多発する地震にそなえ，臥梁やスラブをRCとしたレンガ組積造が奨励されているが，構造的にも施工的にもまだ不完全なものが多いのも事実である。

いわゆる校倉形式としての木壁組積造は，多量の材木を消費し，平面の規模に限界があることから，歴史的保存か，観光政策用にそれらの構法が維持されているに過ぎず，それもカルパチア山系の限られた山間部だけとなった。たとえ住居としての性能が良いとしても，ポーランドのように建設を禁止している国もあるくらいである。断面の大きい柱・梁を組合せた木造軸組構法は，ルーマニア北部をのぞいては，現時点ではやはり数すくない構法になりつつある。比較的小断面（12cm角以下）の柱や小梁を数多く間隔をせばめて架構する方法は，バルカン南部には根強く残り，木ずり下地の塗壁仕上も行われているが，半割材の間柱や胴縁材の使用はまだすくない。

屋根架構は，カルパチア山脈以北では，棟に平行な母屋梁数本で棰を受ける構法が広く使われ，棟木がない場合も多い。伝統的な合掌組は，その水平小屋梁の使用が屋根裏の床版の支持に利用されることもあり，より軽快な部材によって，その原理は保存されている。しかし，一般に屋根勾配は緩くなり，束なしの小屋組としてのメリットはすくなくなっている。バルカン南部になると切妻から寄棟・方形へと屋根の形は変化し，棟木や隅木の役割がより重要になってくる。水平材を多用した上での束立てが多くなり，登り材のうえに細い母屋の屋根が優越する。南部では全体に屋根架構の整然とした構造材のシンメトリックなシステムは厳守されることがなく，それだけ平面が自由に組めることになる。東欧全般に構造金物の使用は庶民住宅のレベルではまだ極端にすくないといってよい。

§5－2　在来構法の歴史的背景

ポーランド・チェコ・ソ連などでは，民家研究は民俗学・文化人類学の領域であり，建築としての民家，とくに架構に関する歴史的記述は殆んど皆無といってよい。わずかに人文地理・地誌的記述では，チェコスロバキヤの民家研究が進んでおり，平面形態や家屋配置の調査の資料の歴史的裏付けがおこなわれている。建築的な資料としては，ブルガリヤの文献は信頼性が高いが，まだ調査例がすくない。東欧の民家研究は，方法論的にも，その資料源としても，1930年代までのドイツ・オーストリーの民家研究に基盤をおき，独自の建築学的な民家研究はこれからの課題である。このような状況のなかで敢えて地域全体の歴史的背景を俯観すれば，構法の変遷についてだけでもまず次の特徴が考えられる。

1. 地域全体をスラブ，東ゲルマン，地中海，アジア系その他の文化圏に大別した場合，中世以降の構法の変化では，ゲルマンの影響力が圧倒的に大であること。
2. 民族が移動する場合，生活習慣や民俗芸術と共に，彼らの伝統的構法を移住地にもたらすか，又はその地の在来構法に結果として同化するかは，地域やその時代，文化の内容によって明らかに異なるが，東欧の場合はゲルマン系は前者，スラブ系は後者であること。
3. この地域の自然環境条件は歴史的変化（例えば気候の激変に伴う森林＝建築材の変化など）が他のヨーロッパ地域に比較してすくなく，現在の環境にとって異質な伝統的構法が固守されていることはすくないこと。
4. この地域における壁の構法の歴史的背景と，屋根架構の変化の過程には，明白な相関関係は研究の現段階では認められないこと。

これら以外についても，周辺諸地域の資料の入手，又は今後のより詳細なバルカン諸地域の研究によってより多くの重要な事項が追加されることが予想される。

§5－3　現在の架構法とその問題点

現在の一般住宅の構法は，この地域に関しては，地域毎の特性の差はすくなくなりつつある。しかし，地域毎の社会的・経済的背景は非常に複雑であり，国民性の違いによって，構法の受けとり方に微妙な差がある。いまだに屋根架構の形態の選択には地方色があらわれるように，これからは今迄の構法的に単純な建築的環境から脱して，社会が計画的に許容する範囲内においての構法の選択が積極的におこなわれるであろう。なかでも東欧では小屋組の架構がその変化に順応できる多様性を持続している点で注目される。この地域に関する現在の木造構法一般，住宅生産の具体的計画，建築の天然又は人的資源の状況など，さらに詳細な資料の蒐集と分析が期待される所似である。

参考文献

1. F. Stănculescu, 他：Tezaur de arhitectura populară din Gorj, 1973
2. D. Grabrijan & J. Neidhardt: Arhitektura Bosne 1957
3. Kratka Istoria na Bulgarskata Arhitektura 1965
4. A. Pănoiu: Din Arhitectura Lemnului în România, 1977

研究担当者　東洋大学工学部建築学科　助教授　太田邦夫
同　上　助手　浅井賢治